

第 1 回 Hiroshima Peace Nexus でパネルディスカッションに登壇しました（2026/7/30）

テーマ：人道支援と緊急対応における実務者・アカデミアのパートナーシップ
会場：広島大学慎思棟 SENDA LAB（広島、日本）

2026 年 7 月 30 日（木）、31 日（金）に広島大学で開催された第 1 回 Hiroshima Peace Nexus 国際シンポジウムにおいて、災害医学研究部門の江川新一教授（災害医療国際協力学分野）がパネルディスカッションに登壇しました。

Hiroshima Peace Nexus は広島大学が 2026 年 7 月に WHO の災害医療情報管理に関するコラボレーションセンターになったことをきっかけに、人道支援と緊急対応に関する緊急医療チーム（EMT）、大学、WHO、JICA、政府組織、非政府組織（NGO）などの連携を一層強化することを目的として、広島大学、ピースウィンズジャパン、京都大学が主催したものです。ASEAN の災害医療体制標準化と学術的な向上をめざす ASEAN Institute of Disaster Health Management（AIDHM）、WHO 西太平洋事務所、PEMAT（フィリピン政府の災害医療チーム（EMT））、AUSMAT（オーストラリア政府の EMT）、MDMC（インドネシア EMT, NGO）、Mercy Malaysia（マレーシアの EMT, NGO）、PCPM（ポーランドの EMT, NGO）、ピースウィンズジャパン（広島に拠点をもつ NGO、EMT）、京都大学ヘルスセキュリティセンター、TMAT（徳洲会 EMT）などが団体として参加し、より開かれたネットワークとパートナーシップ、共同研究と社会実装をめざして集まりました。

災害保健医療対応は被災者の健康を守るための支援として行われるため、大学をはじめとするアカデミアが研究を行うこととは一線を画されがちでした。広島大学公衆衛生学分野の久保達彦教授（京都大学ヘルスセキュリティセンタークロスアポイントメント）は、産業医のバックグラウンドをもち、2011 年の東日本大震災で福島第一原子力発電所の対応作業に従事する方々の健康管理を実現しています。さらに DMAT、JDR 隊員として 2013 年のフィリピン台風ハイエンによる災害で、フィリピン政府と WHO が開発した SPEED システム（避難所の健康サーベイランスを効率的に日報として情報共有するシステム）の有用性を実感し、日本で J-SPEED システムを立ち上げ、2016 年熊本地震、モザンビーク台風アイダによる災害で実務応用しました。これらの実績が認められ、2017 年から WHO の EMT イニシアチブで災害医療対応の情報管理の標準ツール Minimum Data Set として採用され、現在では世界中の災害において EMT が健康被害を把握するためのツールとして使われています。それだけではなく、産業医の観点から災害対応を行っている地域医療従事者、外部から支援に入っている EMT の心身の健康管理にも用いられています。さらには、モンゴル政府と協働で、精神医学的な疾患発生のサーベイランスにも用いられ 24 時間 365 日精神疾患の緊急対応のモニタリングに使われるようになってきています。

このような研究成果と社会実装の両輪は WHO から高く評価され、コラボレーションセンターに採択される原動力となりました。災害医学研究は災害時に発生するデータをいかに研究に活かすことができるように収集するか、データの利活用に関する社会的な課題をどう解決するか、競争よりもパートナーシップを広げ、より若い世代の研究者・実務者を養成するか、そして、実務と社会へのインパクトを高められるかが求められています。

今回の Peace Nexus は大きな第一歩として、今後も定期的開催され、あらゆるパートナーシップと共同研究の足掛かりとなることでしょう。



多彩な参加者が一同に会した第1回 Hiroshima Peace Nexus



パネルディスカッションでアカデミア側の視点からパートナーシップと、研究者が実務者と協働するための課題について議論が行われました。

江川教授は医学とさまざまな災害科学分野の研究者が集う当研究所について触れ、より幅広いパートナーシップの必要性を訴えました。